

杵岐・対馬出土の ベトナム陶磁について

Vietnamese Ceramics Found in Iki and Tsushima

森本朝子

- ①対馬での発見
- ②杵岐での発見
- ③我が国におけるベトナムの初期貿易陶磁について
- ④元末明初の東アジア海域
- ⑤ベトナム陶磁出土地の分布が語ること
- ⑥もう一つの鉄絵陶器

【論文要旨】

1997年杵岐で数十個といわれるベトナム陶磁の出土が報告された。続いて今春（1998年）対馬でもベトナム陶磁が数十個出土した。これらは大宰府で14世紀とされている物と同類で、日本出土のベトナム陶磁「第1期」（14世紀後半～15世紀前半）に属する。この期のベトナム貿易陶磁はわが国では大宰府・博多を中心に沖縄から北九州までの東シナ海沿岸で発見されている。それはさらに北九州から瀬戸内に入り、愛媛県見近島、広島県草戸千軒遺跡、大阪府堺環濠遺跡などに続く。大宰府・博多を除けばいずれも1～2個の出土で、その数は寥々たるものにすぎなかったが、ここで一挙に倍増した。

「第1期」のベトナム陶磁の沖縄での出土は以前から大宰府や博多を凌ぐものではなかったが、いまではますます比重が小さくなってしまった。東南アジア陶磁の我が国への到来を考えるとき誰でも思い浮かべる沖縄であるが、この当時の琉球にはまだ中継地であったことを立証する資料が十分ではない。

元寇などを契機に大きく発展したアジアの貿易は明の海禁政策によって大幅に縮小せざるをえず、各地に深刻な影響がでたに違いない。この中国の対外政策はやがて東アジアと東南アジアを中継する琉球、東洋と西洋を中継するマラッカという構図を実現する。しかしこれが完成するのは15世紀も20～30年代のことであろう。

この間、当代最大の市場である中国を閉め出された南蛮船が新しい顧客を求めてあちこちに漂着している状況がある。それを東シナ海で迎えるのは、杵岐、対馬そして博多の商人達であった。

筆者は以上の状況を総合して、ベトナム陶磁は14世紀後半から15世紀初めという海禁発令後の混乱した東シナ海に、琉球経由よりはむしろ南蛮船によって直接持ち込まれた可能性が高いと考える。